早稲田建築ニュース News of Waseda Architecture

87

March 2010

早稲田建築100年

●発行者＝稲門建築会会長・村松映一
●編集者＝稲門建築会広報委員会（委員長・小菅克己）
●発行所＝稲門建築会
〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1
早稲田大学理工学術院55-5-02-01
電話・ファックス＝03-3208-0640
ホームページ＝http://www.ali-waseda.com/rikogakkai/toumon.arch/
電子メール＝toumonj@poppy.ocn.ne.jp
制作＝都市建築編集研究所
DESIGN: KAKEI GRAPHICS
©稲門建築会

●巻頭言＝「在野」的建築環境学の再出発……宿谷昌則
●父＝内藤多仲……内藤多四郎
●特集＝設計製図企業共同課題
・座談会＝「建築教育のコラボレーション」
……菅順二・車戸城二・葭内博史・山口広嗣・加藤詞史　司会・小菅克己
・「タコツボから出る試み」……石山修武
・設計製図企業共同課題感想……葛野亮・高橋宇宙・小倉麻衣・及川輝
●合同課題感想＝早稲田大学・東京大学合同課題……国枝歓・石井千晶
＝早稲田大学・日本女子大学合同課題……梅沢智美・鈴木優子・武井光・平山健太
●村野藤吾の「横浜市庁舎」が免震構造により再生……国吉直行
●熱湯夜話　●稲門建築会講演会　●見学会
●2009年度建築展・芸術展'09・トウキョウ建築コレクション2010

巻頭言

「在野」的建築環境学の再出発

宿谷昌則
［東京都市大学環境情報学部・大学院環境情報学研究科教授
大学院環境情報学研究科長／苗S51・院S53・博S57］

早稲田で建築環境学のイロハを学んで30数年となる年齢になった。学生のころ、「在野精神」という（ワセダらしい）言葉が好きだった。今でも好きである。今なお、生きた言葉であってほしいと思うが、どうだろうか。

私は、木村建一先生の薫陶を受けて以来、建築環境学を専門として研究・教育に携わってきた。幸運なことに熱力学や生物学との出会いがあって、私なりの建築環境学を曲がりなりにも創出することができた。いまだ道半ばだが、「在野精神」（への憧れ）が私の研究と教育を支えてきたことは間違いない。

多くの方々との出会いによって研究も教育も充実させ得てきた。そのようにも思うが、そんな出会いのひとつが最近もあった。1月末、エコハウス事業（環境省、http://www.env.go.jp/policy/ecohouse/）の仕事で水俣市に行き講演をさせていただいた折に、地元の皆さんのはからいで水俣病資料館を訪問し、しかも館長の下川満夫氏から直接お話をうかがうことができた。

水俣病について、私は一般的な知識をもっていたつもりでいたが、1950年代半ばの水俣病発生の確認から今日に至るまでの歴史について改めてお話をうかがって、認識を新たにせざるを得なかった。東京に生まれた私には、水俣はどこか遠いところ……と思えていたのだが、人を含む自然の物質循環を無視し、経済成長だけを支えようとした工業的な物質循環もどきによって、日本の今日はつくられてきた――その事実が鮮明なイメージとして脳裏に発ち現われる思いがしたからである。

21世紀に入って10年、環境建築・エコハウスなどの言葉を多くの人が口にするようになった。とても喜ばしい……、そう思う反面、空虚さが目立つ事例が増えていることも、また事実といわざるを得ない。

私なりの建築環境学のこれからは〝在野精神〟を改めて大切にすることで前に進める。先人の教訓に触れて、思いを新たにした次第である。

の歴史を次の100年に

2010年9月、早稲田大学建築学科が本科創設100周年を迎えるに当たり、稲門建築会では「早稲田建築100年の歴史を次の100年に」を合言葉に、学校と共に記念事業を企画しています。

「早稲田建築合同クラス会2009、2010」をはじめ、100周年記念設計コンペなど、総務、会員、事業、広報各委員会で様々な企画を実施。さらに稲門建築会全体の記念事業として「100周年記念冊子」の発行と「早稲田大学／稲門建築会・ヒストリー／オーラル・アーカイブ」の実現を2本の大きな柱としています。

「建築学科創設100周年記念事業」◎活動報告

100周年記念事業推進委員会では記念事業推進のため4つの部会を立ち上げ、各委員が精力的に活動しています。企画および選定ガイドライン規則(案)の作成等を行う企画部会、ヒストリー／オーラル・アーカイブを制作管理する実行部会、稲門建築会のすべてのメディアを活用し、記念事業内容を全会員に公開する広報部会、そして代表発起人、発起人を選定し、会員の方々に事業寄金を募るサポート部会です。

「100周年記念冊子」は、今秋に予定している「合同クラス会2010」を目標に、稲門建築会すべての会員の方々に配布する予定です。また、ヒストリー／オーラル・アーカイブは、昨年11月7日開催の100周年記念「早稲田建築合同クラス会2009」シンポジウムと本年1月27日開催の稲門建築会新年会にて、第1回デモ版を発表して出席者の好評を得ました。

稲門建築会すべての会員の方々に対し、100周年記念事業へのご支援、寄金へのご協力をお願いいたします。

地主道夫(100周年記念事業推進委員会委員長／苗S48)

「OBによる仕事紹介」報告

2009年度

2009年12月19日(土)に開催された2009年度「OBによる仕事紹介」は、『稲門建築会OBと学生が本音で語り合う場の提供』をテーマに、建築学科教室と稲門建築会が共催する人気イベントです。

上：OBによる仕事紹介第1部　中：同第2部
下：同第3部

就職を控える学生にとって、様々な業種のOBの方々と直接本音で話ができる機会は大変貴重です。一方、OB側も自分の働く業界や企業の魅力を後輩たちにアピールできる機会とあって、例年、学生OB双方から大好評をいただいてきました。

今年度も例年に劣らず盛会で、学生は昨年と同数の約150名が、また企業別仕事紹介では37企業1自治体が参加しました。約130名の稲門OBが会場に所狭しとブースを並べ、学生と合わせて合計280名が参加、本イベントの確固たる存在感を感じさせました。

プログラムは3部構成です。第1部は、57号館の階段教室で各業種OBが仕事内容をスライドで紹介。限られた時間内で熱心に説明される発表者OBと、真剣に聞き入る学生たちが緊張感のある時間を共有しました。

第2部は、55号館大会議室と第1会議室に設けられた企業別ブースで個別面談できる催しで、話を聞きたい企業を事前にリストアップして、スーツ姿で臨む気合いの入った学生が多く見受けられました。企業側も、趣向を凝らした説明パネルや資料の配布など入念な準備で学生を迎え、双方とも貴重な機会を十二分に活かそうと熱心に向き合う姿が見られました。

立食形式の懇親会が行われた第3部は、入江正之先生の乾杯の音頭で幕を開け、参加者がお酒を酌み交わしながら話に花を咲かせました。最後は学生のエールのもと早稲田大学校歌を斉唱し、嘉納成男先生のご挨拶で、閉会となりました。

岩瀬基彦(学生理事／修士1年)

父　内藤多仲

内藤多四郎(苗S31・院S33)

父は躾に厳しく、礼儀作法やけじめには特に厳しく、掃除や床の雑巾がけなどもさせられ、大学生になっても父の靴磨きは日課でした。けれども学生一人一人に対しては、「夢多き可能性を持った将来のある人たち」なので決して呼び捨てにせず、「君」とか「さん」をつけなさい、といっていました。斯様に内に厳しく外にやさしい人でした。

私も建築の道に進みましたが、小さいころから住宅間取図を描くのが好きだったことと、身近に建築に触れる機会が多かったことが自然の流れとなり、父から強く勧められたわけではありません。なにしろ、父は多忙で帰宅が遅く、来客も多く、ほとんど話したり相談する時間もないほどでした。

早大高等学院から早稲田の建築に進み、当然の如く父の授業を受けることになりました。父の授業は一言でいうと「実務型」で、「初めに理論を説明し、図解で解説を加え、実務的例題を出し、最後に解答を示す」というスタイルでとても理解しやすいものでした。ただ、字がくずれていて読みにくいのには、学生たちも参ったことでしょう……。大学卒業後は、日建設計に入社し、研修後構造部をスタートに計画、昭和52(1977)年より工務(積算)などの仕事を担当しました。私が建築の道に進んだことを父は他人様には何もいっていなかったようですが、時に「何とか息子も建築で独り立ちできているようだ」と話していたそうです。

家の離れにアトリエ(事務所)があったため、仕事の打合せに、企業で出世された卒業生や建築家の先生方がよく来られました。

村野先生もそのお一人でした。日比谷の日生劇場構造設計を依頼されたときのこと、工事が進み、いよいよ鉄骨を製作しないと間に合わない時期に来ているのに、外装仕様が石貼りになるのか、ガラスカーテンウォールになるのか、なかなか決まらず、地震力算出のための荷重設定が定まらず困ったことがありました。しかし、父の直感と決断で石貼りを予測、見事的中して、工程上の問題もなく、「良かった。良かった」といってニコニコしていた笑顔を、今でも思い出します。このような類のエピソードはたくさんあって、苦労も苦労と思わず、むしろ、何時も前向きに楽しく、「難しい仕事がおもしろい」といっていました。

父は山梨の貧農に生まれて、甲府の中学校まで遠い道のりを歩いていたこともあり、非常に健脚で、歩くスピードも人並み以上に速い人でした。

東京タワーを設計していたときは、すでに70代でしたが、タワーの現場に行くとすぐ上まで上るのを常としてたそうです。左上の写真は、おそらく工事中の仮設階段でのスナップだと思います。

タワーに限らず現場主義で、職人さんや鳶さんに質問したりで、こんなところが父の現場知識を実際の設計に生かす基礎であったのではないでしょうか。

家では仕事の話はほとんどせず、今、何の仕事をしているのか、推測の範囲にとどまっていました。

父は「仕事と勉強と遊び(謡曲)は同じ」という、根っからの、アイディアに満ちた勉強家であったと思います。(談)

聞き手・宮川浩(広報委員／苗S56・院S58)

◎座談会「設計製図企業共同課題」

建築教育のコラボレーション

●出席者……［竹中工務店］菅　順二（苗S54・院S56）
車戸城二（苗S54・院S56）
葭内博史（苗S54・院S56）
山口広嗣（苗S56・院S58）
［早稲田大学］加藤詞史（助教／苗H1・院H3）

●広報委員会…小菅克己（司会／苗S51・院S53）・宮川浩（苗S56・院S58）・鈴木章夫（苗S58）・守山久子（苗S61）
平須賀信洋（修士2年）・山田有紀（修士1年）・長侑　希（学部3年／撮影）

菅　順二氏

車戸城二氏

葭内博史氏

山口広嗣氏

加藤詞史助教

座談会風景（2010年2月2日）

近年、建築学科の設計製図課題では学外との連携を積極的に進めている。学部2年の設計製図Ⅰでは日本女子大学、学部3年時の設計製図Ⅲaで東京大学とそれぞれ合同課題を実施。さらに今年、新たに企業との共同課題が始まった。実社会で実務に携わる企業の設計者が講師となり、課題の設定からエスキース、採点・講評まで一連の授業を共同で担当するものだ。初年度は、竹中工務店から4人の卒業生が参画した。

今号では「建築教育のコラボレーション」というテーマを掲げ、各課題に参加した教授や社会人講師、学生たちの声を通して、これら学外との連携課題の狙いや成果を総括する。まず本頁の座談会では、1月30日に公開講評会を終えたばかりの共同課題講師陣4人と担当の加藤詞史助教に集まっていただいた。

……課題の狙い……

スピード感と全員教育

小菅（司会）◉今回の共同課題では、「『環境と景観』新たなオフィス建築の可能性を創造する」というテーマを設定されました。設計のポイントや課題条件など細かく設定されましたが、どういう狙いがあったのでしょうか。

設計製図企業共同課題講評会の様子

菅◉今回は、カリキュラムも提案してくださいという教室からの話でした。企業が課題を出す意味から、様々な社会的背景を持ったテーマということで「オフィス」を課題に選びました。さらに現在、重要視されている問題をかぶせていくことで、周囲の建物や空地との関係を重視することや、ワークプレイスとしての考え方、環境対応などの与件を設定したのです。

車戸◉課題設定は企業の特質がよく出ていたということから「うん、それいいね」という感じですぐに決まりました。

小菅◉課題条件以外では、どのような点を考えましたか。

葭内◉重視したのは「スピード感」と「全員教育」です。スピード感という意味では、企業が出す課題ですから、実務と同様の進め方をしようと考えました。特徴は、前半の4週間で基本設計までを一度完了させ、後半の4週間ではそれを壊しつつ、再構築していくカリキュラムにした点です。

山口◉事前に1カ月ほど社内でディスカッションを重ね、課題にどうやって取り組むかを議論しました。そこで、全員にコメントしたい、4人で約80人の学生をきめ細かく見ていこうという方針を固めました。全員教育です。

菅◉選抜した作品についてエスキースするのではなくて、全員の作品を見る。

山口◉ただ、心配だったのはそういう作業スペースを確保できるのかという問題です。

加藤◉後期課題については、今年度から専用のスタジオを用意するという試みも行ってきました。

通常設計製図のエスキースでは、学生全員に共通するテーマを持った代表的な作品を20点ほどセレクトして講評するという方法を取っています。第3課題（東京大学との合同課題）は、すべての学生の作品について講評する全員教育を導入しました。

今回の第4課題の企業共同課題では、4人の講師にお願いできたこと、作業スペースが整ったことから、グループ単位ではなく個人単位での全員教育を実施することができました。

小菅◉毎回の授業はどのように進めましたか。

菅◉毎回、テーマを設定し、決められた提出物を課す。4つのユニットごとに学生一人ずつに対するエスキースを行い、その後、各ユニットから選抜した作品に対して合同で講評するというプログラムを毎週行いました。

車戸◉石山先生から「なんとか部屋を確保するから、1回5分でもいいから何度も来てくれ」と要請され、定められた金曜日以外にも、スタジオには各自できるだけ足を運ぶようにしました。

葭内◉私は合計12回、大学に足を運んだ勘定になります。

……全員教育……

それぞれの個性との対話

小菅◉私の学生時代は、家にこもって作業を進め、提出時に披露し合うスタイルでした。現在は、CADやメールが発達して、家での作業がさらにしやすくなっているはずですが、あえて直接の対話を重視し、4人の講師が全員の作品を見る方式を採用したことにはどのような意味合いがあるのですか。

葭内◉それが教育のスタンダードになってきており、ぜひ早稲田にも持ち込みたいという意識が大前提にありました。世の中の流れとして、あらゆる人材に対してコンタクトを取っていく必要性が高まっています。深いレベルで学生に接しながら教育していかないと、人材を育てていけません。

加藤◉社会が多様化していく中で、個別解を求めていく必要があります。微細な個別解の中にこそ普遍解があり、それを導いていくという方向性です。

山口◉学生時代の設計演習で「早稲田は芸大とは違う。200人のもつ個性を見ることが勉強だ」と池原義郎先生が話していらしたことが、今でも心に残っています。設計製図もそうであるといいなと思っていました。

車戸◉才能を見出すというだけでなく、いろいろな建築の学びがあってよいと思うのです。建築を考えることの良さは、そこにひとつの目的主義的な答えが存在するわけではなく、答えのない問題を考える。これは成績上位の人材にとってだけでなく、全員に対して大切なことです。

学生ともっと密接な対話が重要なのではないかという議論の原点は、実は葭内さんが修士時代に設計製図のTAを務めていた時にあります。指導

する際に、大学院生を総動員して全員の作品にコメントを付けたところ、「B」や「Bマイナス」を取った学生たちから、TAにいろいろな反応がありました。すべての学生に対してコミュニケーションを取っていくことの大切さを感じました。

……課題の進め方……

最終成果物に何を求めるか

小菅◉課題の進め方について感じられたことをお教えください。

菅◉われわれが読み切れなかったことに、CADの影響があります。今はCADで製図するため、簡単に何度も図面を描き直せます。そのため、コンセプトを固めるまでに時間をかけられ、しかも段階的に作業を進めていくという感覚に乏しいですね。そこがわれわれが学生の時との違いであり、必ずしもうまく誘導できなかったのは今回の反省点です。

山口◉指導に際しては、実社会のリアリティを教育に持ち込もうと考えました。例えば、クライアントから設計者が選ばれる。スピードのリアリティだけでなく、選ばれる競争というリアリティもあるのだということを伝えたりもしました。

一方、学生の設計製図に何を求めるのかという点も議論しました。海外では、学生に直接的な結果を求めず、図面を描くより、考えていく過程そのものが重要、という思想から、必ずしも最終成果物としての図面を求めない大学もあります。議論のすえ、早稲田の設計製図は図面の書き方も含めた成果を求めているという結論に落ち着きましたが、そのために前半の作業が忙しくなったという印象は否めません。

加藤◉図面だけでなく、見映えがするといった直接的な成果が過度に求められているように思います。これには時代の要請もあるかと思います。学生自身の内面に残る成果だけではなく、目に見える成果が求められ、じっくり考えていくという感覚が学生に薄れているように感じています。

菅◉最終成果物については、むしろ大学側が強く求めていると感じました。

車戸◉質の高い成果物が高い価値を認められるというのが実社会での評価です。それを教育に持ち込むことは有効ですし、結果を求めないのはむしろレアケースでしょう。

加藤◉もちろん必要だと思います。しかし教育では、それだけではないのではないでしょうか。深く学生に残る答えのつくり方という方向性もあると思うのです。

葭内◉学生時代に痛感したのは、建築を考えることの深さです。与えられた課題に対して一生懸命考えていくけれど、他の学生がまったく違う発想の提案をしてきて刺激になる。残念なことに、今回はそれが少なかったように思いました。

小菅◉学生とさらに密に接していけば、より深い建築的思考を引き出すことができたのでしょうか。

葭内◉今の段階では、もっと密にコンタクトしていくという方法しか見えませんね。やり切ったというよりも、次の課題が見えてきてフラストレーションが少し残ったというのが実感です。

……課題を終えて……

「建築が好きになった」

小菅◉課題全体を振り返っていかがですか。

葭内◉実現できなかった点のひとつは、技術の側面です。現実の建築に技術は欠かせませんから、どこかで技術とコンタクトできる場所を与えたかったですね。これは今の製図教育の限界でもあります。

加藤◉模型をつくっては壊すという手作業を通して、構造的に切り込んでいくセンスを体得してきました。CGや解析などデジタル化の進んだ現在だからこそ、直感的な感覚を養うことが、技術を扱う上では欠かせないと思います。

車戸◉実社会に出ると、エンジニアリングの限界をどう突き抜けるかがとても大切になります。いかに技術を使いこなせるようにしていくかという思考のきっかけを学生に与えたいと考えました。

菅◉3年の課題で、一度、「構造+環境+設計」の共同設計を体験しておくといいのではないでしょうか。卒業設計よりももっと早くエンジニアリングとの共同の大切さを感じてもらうほうがいい。

小菅◉逆に、学生から教えられたことはありますか。

菅◉学生は柔軟ですね。発想が多様で、結果的には不安になる必要はありませんでした。また講師陣や先生からも、知的な刺激をもらいました。

車戸◉学生一人一人の個性に対峙することが新鮮でした。何度倒されてもぶつかってくる学生もいる。そして立ち上がる際に、作品が一気にジャンプする瞬間があるんです。それを見ると素直に感動します。

山口◉今回、私はあえて良いところを見つけ出してポジティブに評価する方法にこだわりました。予想を超えてジャンプアップした学生もいます。自分の中で固まっていた価値観や考え方を溶かしてくれるパワーをもらった気がします。

葭内◉ある学生からこんなメールをもらいました。「毎回のエスキースを大事にして建築を積み上げる手法は、新しい経験でした。そして何よりも、この課題を通して建築を好きになれたことが一番の成果です」

小菅◉建築教育にはいろいろな方法があるのでしょうが、「建築が好きになった」という言葉は、何よりも一番嬉しいですね。今日はどうもありがとうございました。

設計製図企業共同課題の授業の様子

■設計製図企業共同課題概要

❶……課題

「環境と景観」

新たなオフィス建築の可能性を創造する。

❷……設計条件

計画地：東京杜千代田区内幸町（現・日本プレスセンター敷地及び隣接空地）

用途：世界的スポーツ企業の日本本社ビル

敷地面積：3、275㎡

延床面積：26、000㎡

❸……提出物

配置図（1／500）

平面・立面・断面図（1／200）

内外透視図

基準階オフィスレイアウト

各階面積表

❹……スケジュール

・2009年

11月20日　課題説明会（課題説明・オフィスに関するレクチャー）

11月22日　竹中工務店東京本店見学会

11月27日～12月11日（毎週金）デザインレビュー

12月18日　中間提出・中間講評

・2010年

1月8日　提出物への事前指導

1月14日　課題提出

1月15日　採点

1月30日　公開講評会

【参考】2009年度設計課題

◉2年前期（建築表現Ⅲ）

・1週間設計課題　担当：加藤詞史

・住宅設計課題1　担当：石上純也（学外招聘講師）

・住宅設計課題2　担当：谷内田章夫（学外招聘講師）

・住宅設計課題3　担当：入江正之

◉2年後期（設計製図Ⅰ）

・3～5世帯の集合住宅の設計（日本女子大合同課題）担当：小矢部育子、石山修武

◉3年前期（設計製図Ⅱ）

・美術館湾岸にたつホルヘ・オテイサ記念館）

担当：入江正之

・ハイパースクール　担当：古谷誠章

◉3年後期（設計製図Ⅲa）

・西葛西インド人コミュニティとバザール（東大合同課題）担当：難波和彦、石山修武

・環境と景観（企業共同課題）担当：竹中工務店

◉3年後期（設計製図Ⅲb）

・製図室のある建築学科学生寮　担当：野村悦子

先生から

タコツボから出る試み

石山修武（早稲田大学教授／苗S41・院S43）

長年教師をやっていると、気がつかぬ間にモノの見方や、恐ろしいことに人間観まで教師目線になってくる。世にいう「先生といわれるほどの」の世界の住人になってしまう。

ある年、鈍くなっていた私でさえ、これは何かがおかしい、危ない！と痛感した。学生の設計製図の出来もさりながら、設計製図への取り組み方の空気全体がドンヨリと停滞していた。しかも、それはもう数年続いていたのであろう。教師の側の停滞は敏感に学生に伝わる。それに気付かなかっただけだ。大きな危機感を抱いた。それで具体的な対応策を講じたいと考えた。

まず、自分を変えないとどうしようもない。設計製図の指導を生き生きと楽しめるようにしないといけない。学生の出来が悪いなんて上から目線ではなく、出来が悪いのは先生の責任であると問題を正視することだ。設計製図に生き生きとなれる自分を取り戻そう。それには強敵と競うのが一番だ。それで東京大学建築学科との合同課題を実施した。これは実に面白かった。何より教師としての自分が面白がれた。教師として本気になれて取り組めた。その本気は学生にも伝わったと思いたい。そして3年続けて、一定の成果も得られた。自分がリフレッシュできた。そうなってくるとまだまだ物足りなくなる。欲が出る。それで学科教室の設計製図教育のタコツボから出る試みを続けた。

それには社会の荒波に現実の中で一番強く対面している組織、集団と協同するのが合理的だ。建築学科教室の先生方と議論を重ね、スーパーゼネコンのエキスパートたちと教育を共にしたいと考えるに至った。当然のことながら稲門建築会に相談。村松映一会長も関心を示して下さり、それでは始まりは竹中工務店設計部との協同から始めましょう、となった。指導陣は設計部長4名の先生方＋稲門建築会会長の豪華メンバーとなった。学生にとっても大変に良い経験となった。早稲田建築3年生の設計製図教育システムはベストに近いまでになったと確信する。

設計製図企業共同課題感想

◉自分を試せた総括的課題

葛野亮（早稲田大学建築学科3年）

私たちのユニットは、比較的自由なテーマ設定や、アプローチが許容されていたように思う。そのような中でも、よりリアリティのある計画が求められ、今までの課題で培ってきた手法が試されることとなった。内観や外観のより立体的な考え方等課題は残ったが、先生方が力を入れてくださった平面計画は、みな習得することができたように思う。この課題は、卒業設計前最後であり、今までの設計課題の総括としてとても有意義なものであった。

◉速度・見切り発車・形からの発見

高橋宇宙（建築学科3年）

求められたのは、速度であった。エスキスごとの提出要求にそうために、アイデアをすぐに形にする。

それゆえにテーマなどを見切り発車的に設定し、課題を進めていく。この点で、テーマ設定に時間を割く以前までの課題とは大きく異なるように感じた。そして、先生との対話の中で、形のstudyの中で、自らのアイデアの可能性を発見、developしていくという過程を経て、テーマにfeedbackしていったように思う。

「ユニットY」では、まずオフィスの最低限を厳しく指摘された。そして、各人のアイデアについての議論が、豊富な参照事例を挙げられながら行われたという印象である。

◉思考を言葉にする経験

小倉麻衣（建築学科3年）

今までの課題との大きな違いは、これまで講評に挙がった学生のみが行っていた、自分の考えを先生や他の学生の前で話すことを全員が経験したことだと思います。言葉にして相手に伝えることで己の思考を組み立て直し、より多くの人に伝わる表現を探ることを学ぶよい経験になりました。また、「ユニットK」では学生の興味・関心を、いかに設計に結びつけるかを探りながら課題を進めました。この経験は私たちの今後の勉強の仕方のよい手がかりになったと思います。

◉第4課題を終えて

及川輝（建築学科3年）

スーパーゼネコン出題の第4課題。初めての試みとして、今年、竹中工務店の設計部部長クラス4名に来ていただいてオフィスビルの課題を出題していただきました。課題は4ユニットのスタジオ形式で行われ、私は「ユニットH」として竹中工務店の蔑内先生をはじめとして、柳沢先生、助手の山村さん、TAの指導のもと、課題を進めてきました。

「ユニットH」で特徴的だったのは、建築の美学であったり、さらには自分がどういう建築を都市の中に置きたいのか、発信したいのか、といった建築を学ぶ上で根源となるようなものを教えていただいたように思います。

先生方には大変お世話になりました。特に蔑内先生には親身にエスキスを繰り返していただき、課題提出後も講評会までの間、構造のエスキスを取りはからっていただいたり、時間を割いてエスキスしていただいたりと、さらなるブラッシュアップを図ることができました。今まで見過ごしがちだった視点を意識したり、建築を多少なりともリアルに感じることのできる貴重な時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

早稲田大学・東京大学合同課題講評会の様子

早稲田大学・東京大学合同課題感想

◉東大早稲田合同課題感想

国枝歓（東京大学建築学科3年）

今回の東大早稲田合同課題は長距離走のようであり、どちらかといえばゴールが設定されて、走りきるマラソンというよりも、時間内にどこまで走れるかの持久走のようだったと感じている。課題の趣旨を理解する作業から始まり最後の合同講評会の発表まで、班の中でアイデアを出しては、帰結点の見えぬまま四苦八苦し、先生方に話をしては考えを整理する、を繰り返し行い続けた期間だった。その期間中、僕らは建築の映像表現に挑戦する選択をしたことで、早稲田大学芸術学校の鈴木了二先生をはじめとする映像ゼミに参加することができた。その場では、映像表現のノウハウのみならず、設計のコンセプトについても相談に乗っていただき、東京大学の先生方とは違う目線で案を見直す機会が生まれ、この試行をより多く繰り返す機会も多くいただいたと思っている。この繰り返しを苦しみながらも最後まで続けたことが、先につながると信じて、これからも勉強していきたい。

◉東大早大合同課題を経て

石井千晶（早稲田大学建築学科3年）

今回の合同課題は、規模は縮小したものの、前回と同じ西葛西が対象敷地となり、建築についてのみならず、敷地に表出される日本と世界が抱える諸問題に対して、昨年に比べより深い考察が両校で求められることとなり、私たち学部3年生にとってこれまでで最も難しい課題となりました。

今回の課題に対して、57号館地下の理工レストラン跡に新しくできた建築スタジオでの生活と、先生方のご指導は、そのすべてであるといえます。「設計製図Ⅲa」履修者全員がそこで寝泊まりをしながら課題に取り組み、先生方の熱心で密な指導を毎日受け、私たちの生活が完全に課題と一体化したことで、持てる最大限のエネルギーを課題に注ぐことができました。また、生活を共にし課題に取り組む仲間と刺激し合い、励まし合い深めた友好は、かけがえのない財産であります。

大変ハードではありましたが、建築を学ぶことの奥深さ、デザインの面白さを改めて感じ、貴重な経験をさせていただきました。

早稲田大学・日本女子大学合同設計課題感想

◉合同講評会を終えて

梅沢智美（日本女子大住居学科2年）

早稲田と日本女子大の合同設計課題は、私にとってとても有意義なものとなった。エネルギッシュで個性の強い早稲田には圧倒され、いい刺激を受けた。

今回は半期という長い期間にわたって同じ課題に取り組んだため、設計を進めるにつれてコンセプトがぼやけそうになったり、当初とは違うことをしていたり、ということがあった。自分の作品を、一度離れた所から客観的に見つめ直すことの重要性を強く感じ、今後の課題としていきたいと思った。

◉合同設計課題を終えて

鈴木優子（日本女子大住居学科2年）

後期の4ヵ月強をかけた持久走であった。敷地分析にはじまり4段階の提出を経たわけだが、私たち女子大の生徒にとって初の長期課題、そして合同設計となる。他大学のカラーを感じ圧倒されることも少なからず。ただ手探りで進み、総じて専ら反省ばかりではあったものの、多くの刺激を受け実りある結果になったように思う。ありがとうございました。

◉設計製図Ⅰを終えて

武井光（早稲田大学建築学科2年）

今年度は、神楽坂、新宿、大久保、目白のすべての敷地で日本女子大学との合同課題となりました。私の選んだ目白という敷地は、早稲田大学と日本女子大学との間に位置し、敷地を訪れるたびに両校の多くの学生とすれ違い大変刺激を受けました。また講評会では早稲田建築目線でのクリティークだけでなく、日本女子大学の先生方からもご意見をいただき、自分では今まで気づかなかった自身の一側面を発見することができ非常に実りのある「設計製図Ⅰ」になりました。

◉集合住宅設計課題を終えて

平山健太（早稲田大学建築学科2年）

この課題は今年も日本女子大との合同課題として行われた。特にわれわれは、普段閉塞的な環境にいるからだろうか、他大学との課題を通した交流は非常に新鮮さを感じた。同じ課題、同じ敷地に対して、両校から様々な視点により様々な提案がなされ、その中でお互いの校風や伝統の違いと、その影響力の大きさを感じた。その意味で今回の課題は自分自身の置かれている立場、状況を客観視するひとつのきっかけとなる、有意義な課題であったと考えている。

早稲田大学・日本女子大学合同課題講評会の様子

2009年度建築展

石黒雅之（2009年度建築展代表／建築学科3年）

考現学的思考への試み

2009年度の建築展は『東京数寄』をテーマに掲げ、活動して参りました。これは、建築学科100周年記念の年として、今和次郎先生の「考現学」を切り口に、現代的な解釈で都市にアプローチしようというものでした。3年生を中心に5つのプロジェクトを進めましたが、そのどれもが、考現学に端を発する分析的なスタディの上に成り立っており、特に、建築展としては異例な、55号館アトリウムでの映像作品に関しては、完成時、改めて今先生の偉大さを噛みしめた瞬間でもありました。これらの活動を通して、メンバー一同大きく成長できたことも実感しています。

さらに昨年は、合同クラス会のプロジェクトに関わり、作品展示の機会もいただけたことは、大変有益な経験となりました。これらの経験が、後輩たちが建築展の活動を引き継いでいく際の布石となれば大変嬉しく思います。

最後に、2009年度建築展が、皆様のご協力の元に成功を修めることができたことを感謝し、この総括を締めくくらせていただきたいと思います。

上：小学校プロジェクト
下：バス停プロジェクト

芸術展'09

小平沙紀（芸術展'09実行委員／芸術学校建築学科2年）

昨秋、西早稲田キャンパスにて、「芸術展'09」が開催されました。今回は11月7～8日の2日間で、例年の3日間開催から縮小された日程でした。一日といえども、この縮小はかなりの影響力で、日程も予算も絞られた中で、レベルを落とさずに見せることができるのか、手探りでしたが、無事実施することができました。

例年通り、51号館学生ラウンジ、54号館4階、中庭の3ヵ所を展示場所としました。

ラウンジでは、建築科1年の「5mキューブ＋住宅模型1／100展示」、2年設計課題の優秀作品と3年建築設計コースの共同設計の展示、3年構造設計コースの構造力学をわかりやすく表現した「ちからとかたち展」、都市デザイン科1年の「Bodyscape―身体と都市―」、空間映像科有志による作品展示「PHOTOs」が行われました。

54号館では、川口芸術学校の視覚作品「ミカンノカンヅメ」、来場者参加型コンテスト「写真展～わたしの好きな写真～」、建築科と空間映像科のコラボレーション「東京への想い」、芸術学校という名前を体現した展示となりました。

また中庭では、軽井沢セミナーでの斉藤ゼミの活動報告と再現「布とヒモと仲間と場所をつくる」、ひとつの作品とそれを見るための空間「ふたりぼっちの美術館」、そして恒例となった、中庭という外部に作り出す〝内部〟空間「shelter5」、たくさんの企画が実現されました。

仕事をしながら、かつ夜間の授業をこなしながらの芸術展は、時間確保に最も苦慮します。私も、設計課題の提出・仕事や資格試験、あらゆることが覆いかぶさってきて四苦八苦しました。しかし、だからこそ、芸術展は学生同士の協働が必須となり、個人戦ではなく団体戦である、文化祭本来のたくましさを発揮できるのだと思います。私たち卒業を控えた学生にとっては、最後の芸術展、それが名残惜しく思える芸術展だったと感じています。

また今回は、積極的に企画発案する1年生の姿が目立ちました。次の芸術展も期待できそうです。

未熟な私共に協力下さった事務局の方々、サポートして下さった先生や理工展の方々、お世話になったすべての皆様に厚くお礼申し上げます。

右：ふたりぼっちの美術館
左：5mキューブ＋住宅模型1／100展示

▼トウキョウ建築コレクション2010▲

長崎知彦（トウキョウ建築コレクション2010代表／修士1年）

全国の修士学生による修士設計・修士論文を集めて日本初の全国規模の修士設計論文展を行った2007年以後、企画を継続、発展させながら「トウキョウ建築コレクション」は今年で4年目を迎えることができました。2010年は3月2日(火)～7日(日)、代官山ヒルサイドテラスで開催されました。4年目にあたる今年は、過去3年間で段階的に発起させた「全国修士設計展」「全国修士論文展」「特別講演会」「プロジェクト展」の4つの企画の開催意義を再考した上で、さらなる展示や議論の充実を目指しました。出展者やその作品、ゲスト、来場者が、各々の専門分野・立場を超越し、共有されるような場に成長することで、専門分野間での相互理解が図りにくい今日の建築業界に対して、専門性を越えるという価値基準を示していきたいと考えて活動を続けております。

本展覧会が今後長期にわたり継続し、時代性を持った「コレクション」が集積され「アーカイブ」としての価値を持つことで、建築教育の発展に寄与していける展覧会に成長していくことを目指していきます。

上・中：トウキョウ建築コレクション展
下：2010年のフライヤー

東京都市大学新建築学科棟特別見学会●報告

2008年日本建築学会賞（作品賞）を受賞した「東京都市大学（旧武蔵工業大学）新建築学科棟＃4」の特別見学会が、昨年11月17日（火）、催されました。多数の参加応募をいただき、当日は当初の予定定員を上回る28名が参加しました。

見学会はまず、1階グランドギャラリーにて設計者である岩崎堅一教授から説明をいただき、4階研究室→ゼミコーナー→屋上庭園→3階研究室→2階研究室→デザインステージ→グランドギャラリーの順にご案内いただきました。

見学会を通して感じた特徴として可変性が挙げられます。各所に様々な工夫が見られましたが、特にこれを象徴する大空間のグランドギャラリーは美術館のように壁を動かして空間の構成を変えることができます。製図室、プレゼンテーション空間、展示会場、会議、パーティーなど様々な用途に対応できる大空間は、テーブル、椅子など細部にもこだわった設計の賜物ですが、これらの設計は岩崎研究室をはじめとする学生のスタディを元に進められたそうです。

個人的には、建築を学ぶ学生として印象的だったことがふたつあります。まず泊まり込みの学生が多く、活気があるという点です。実際に見学当日も寝袋を目撃しましたが、そんな学生の味方であるシャワー室があります。最近では洗濯機設置の要望が多いとのことですが、私もそんな経験があるので共感しました。もうひとつは、各研究室には壁がなく、「研究室シェルフ」と呼ばれるスチールパンチングを組み合わせたユニット家具だけで仕切られている点です。自分を省みるに、同じ専門分野の研究室同士でも部屋が違えば交流がなかなかできないもので、その壁を越えた交流が容易に想像できる空間が学生に与えられていました。

今回の見学会開催にあたり、ご尽力いただきました岩崎堅一教授、東京都市大学の関係者様をはじめとする皆様に深く感謝申し上げます。

杉山幸司（事業委員会学生理事／修士2年／苗H20）

上：見学会の様子。大きな吹き抜けがあるグランドギャラリーで
中：グランドギャラリーでは時に建築展も開催される
下：建築学科棟外観

2009年度稲門建築会職域幹事会・新年会　報告

2010年1月27日の夜、「2009年度第2回稲門建築会職域幹事会」に続き、新年会が55号館1階会議室で盛大に開催され、理事、職域幹事、一般会員の方々が出席されました。

会は村松会長の開会のご挨拶で始まりました。村松会長より、建築学科創設100周年記念事業の概要と協力要請等のお話があり、引き続いて、歴史研究室の中谷先生より、建築学科創設100周年記念事業の一環として企画しているオーラルアーカイブの説明と、デモ版を公開いたしました。初めてデモ版をご覧になる方もあり、具体的なオーラルアーカイブのイメージと、稲門建築におけるオーラルアーカイブを作成する意義が、皆さんに伝わったのではないかと思います。

副会長の菅原氏による乾杯で、懇談へと進み、暫し歓談後、事務局より日本建築学会会長選挙の立候補者の紹介がありました。今回の立候補者は稲門建築会から推薦で関東支部代議員候補、常議員候補として立候補された方が5名、企業等からの推薦で関東支部代議員候補として立候補した方が4名で、入江先生をはじめ立候補された方々が抱負を述べられました。

宴席ではビール、ワイン、日本酒、焼酎と料理が豊

村野藤吾の「横浜市庁舎」が免震構造により再生

国吉直行
（都市デザイナー／横浜市都市整備局都市デザイン室／横浜市立大学特別契約教授／苗S44・院S46）

横浜市庁舎は、昭和20年の空襲で4代目庁舎が消失し、その後は他の2地区に移っていました。昭和30年代に横浜開港100周年を記念する事業として7代目庁舎が計画され、設計者は前川國男事務所など5社に対する指名コンペによって村野・森建築事務所が選定され、昭和34（1959）年に完成しています。コンペの結果について当時の地元新聞は「近代感覚に鋭い反面、重厚な作風を持って鳴る日本建築界の重鎮。横浜の新市庁舎に示された力感にあふれながら、親しみを覚えずにおかないその作品は全審査員を魅了してしまった」と評しています。

市庁舎は、市会棟（RC造地上4階、地下1階）及び行政棟（SRC造地上8階、地下1階）、市会棟と行政棟をつなぐ市民広間から構成されています。打ち放しコンクリートの柱、レンガ状タイルの外壁、効果的に配置されたバルコニーにより豊かな陰影を作り出しています。2層吹き抜けの市民広間は、設計者の着想による空間であり、壁面には彫刻家辻晋堂によるレリーフが設置されています。

私は、昭和46年に横浜市に入庁以来、約39年間この庁舎内の都市デザイン室で活動してきました。昭和48年に最初の都市デザインプロジェクト「港町くすのき広場」を市庁舎脇の道路の場所に計画した際は、ヨーロッパの都市のように市庁舎の外壁デザインを広場の路面デザインに継承し、さらに周辺ビル群にも展開させるなど、横浜都市デザインの出発点とし、また、以来、市庁舎デザインの維持管理面の相談を受けてきました。

昭和60年代には、コンクリートの中性化防止の工事が行なわれ、その際、バルコニーをつぶして室内面積を広げる案もありましたが、原型を維持するよう市長に進言しました。また、50年代には、手狭な庁舎を補うため、市民広間は、安価なパーティションの執務スペースに埋め尽くされてしまい、辻晋堂作品のレリーフが見えないとの批判や、明るい雰囲気のインテリアへの改修などが市議会側から要求されました。この改修設計については、当時村野会会長であった竹山実さんにお願いしました。

市庁舎敷地は、埋立地であり、地下30～40mまではシルト及び粘土を主体とした地層となっており、市会棟及び市民広間は地盤改良を施した直接基礎を採用していますが、高層の行政棟は直径5～3・5mの井筒杭を用いた基礎構造です。

耐震診断調査により構造補強が必要とされていましたが、市会棟は平成13～14年度に耐震工法による補強を行いました。行政棟については、市庁舎業務を継続する「居ながら」による工法が必要とされたため、免震レトロフィット工法が採用されました。また、市民広間における耐震工法部と免震部の接点でのレリーフの扱いについても細心の工夫が図られ、平成19年2月着工、築後50年、開港150周年の年である平成21年4月に竣工しました。

横浜の歴史資産として愛され、村野作品は生き続けています。今回の免震工事では、横浜市まちづくり調整局公共建築部の大場重雄課長が愛情を注いで工事を担当し、工夫や配慮を重ねました。

横浜市庁舎は手狭なため、現在、周辺の多数の民間ビルを借りています。将来の移転や現庁舎周辺での再開発なども含めた検討作業が始まっていますが、免震工事を終えた現市庁舎については、将来の別の用途での活用なども検討されると思われます。

竣工当時の横浜市庁舎

稲門建築会講演会●報告

「場所との応答をとおしたデザインを求めて」

スペイン・カタロニア地方の伝統的石造民家「masia(マシア)」を修復・再生させた「実験装置／masia2008」により第22回村野藤吾賞を受賞された、入江正之教授による講演会が、昨年11月27日(金)、催されました。本講演会では、「実験装置／masia2008」をはじめとした近作を紹介しながら、「建築するという行為が場所に依拠するものである」とする、先生の設計思想が語られました。

紹介された作品は、妙蓮寺の店舗併用住宅、草加の長屋、大多喜町庁舎建設設計業務プロポーザル・コンペ案、こだま幼稚園、実験装置／masia2008の5作品です。その中でも、個人的に大多喜町庁舎のコンペ案、こだま幼稚園のお話が大変印象に残りました。私たちの学年は、学部1年の後期において、大多喜町役場の図面のトレースと模型製作を課題として課せられたので、大変思い出深いものを感じながら拝聴しました。この建築が立地する地形、そしてそばにある夷隅川の流れから大地の動きを抽出し、その流れに沿った空間を立ち上げるものとして提案されたコンペ案は、本講演会の題目に即した作品の中でも特に心に残りました。

次に紹介されたこだま幼稚園は、デコボコした独特な外観もさることながら、内観の木を基調とした中での打ち放しコンクリートとのバランス、そして何よりも屋根と天井の波打つ形状が印象的です。そばにそびえる浅間山の波打つ形状、そして入江先生が保育の理念とする、生命感を音の波として表現された建築は、その中で育つ子供たちに活力を与えるものであると感じました。

スペインの職人との楽しい体験談など、作品ごとに裏話を交えながら語る先生のお話は、終始本講演会参加者の興味を引く内容であり、大変楽しい会となりました。

大変興味深く楽しいお話をして下さいました入江正之先生、開催にあたりご尽力くださいました入江研究室関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

大川亮(事業委員会学生理事／修士2年／苗H20)

富に用意され、皆さんグラスを傾けつつ、あちらこちらで会話に花が咲き、現在の経済不況を吹き飛ばすがごとく笑い声が響き、会場は大いに盛り上がりました。

その後、本年度合同クラス会について二宮実行委員長(苗S59)より挨拶がありました。合同クラス会に対する意気込みが伝わったのではないかと思います。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、まさに宴もたけなわといった状況ではありましたが、最後に全員で「都の西北」を合唱し、大成建設の松本氏のエールで締めが行われた後、馬場璋造氏による閉会のご挨拶によりお開きとなりました。

鈴木康史(東京建物／苗S59)

熱湯夜話 十五夜

「卒業から十数年」(2010年1月18日)

語り部：各務謙司(各務建築計画／苗H2・院H4)
川村　浩(三菱地所設計／苗S63・院H2)
星野聡基(日本設計／苗H10・院H12)

今回の熱湯夜話では、意匠系、構造系、環境系でご活躍されている卒業から10数年の3名の方にお話をうかがいました。それぞれの系からの視点で、学生時代に考えていたことと社会に出てからのギャップや、学生時代の経験が実務に生かされたことなど、身近な将来を考える上で大変ためになるお話ばかりでした。

建築家の各務さんは、ハーバード大学留学時代の「子供と作る建築」という課題を通じて施主との対話の中からモノが出来あがっていくという、その後建築に携わっていく上での礎となるような経験をされたそうです。

川村さんは、東京女子大学の設計で、建築家との対話の中で構造設計者としての創造性を盛り込むプロセスが醍醐味であると実感されたそうです。

設備設計者の星野さんは、学生時代にソーラーハウスの温熱環境シミュレーションを行っていて、栃木県庁舎の設計の際には風害のシミュレーションによってビル風を利用した地下駐車場の換気を考えつかれたそうです。学生時代の経験が実設計に生かされている事例として大変興味深いものでした。

最近では以前に比較して設計の初期段階から環境や設備の人間がより深く参加するようになり、建築といえば意匠といった考えから、環境や構造が意匠の意味づけのバックグラウンドを成すものとして、より拮抗した関係に変化してきています。大学院では他系の研究室との横のつながりは希薄になりますが、実務ではまさに他分野との対話こそが重要であるということを学ばせていただきました。

森勇司(学生理事／修士1年)

訃報

下記の方々が亡くなられた旨、事務局にお知らせいただきました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

山内武雄(苗S7)H18.4.11
菊地新平(苗S11)H21.12.18
亀川　清(苗S22)H21.10.31
平塚高邦(苗S26)H21.10.24
吉川昭吉(苗S26)H21.8.3
坪田　隆(苗S27)H17.1.21
外島康弘(苗S28)H19.4.3
宮坂幸人(苗S30)H22.1.18
板倉栄次郎(苗S32)H21.8.25
坪田久男(苗S33)H21.11.14
藤田　毅(苗S33)H21.11.6
星野　光(苗S33)H21.2.25
気賀沢俊之(苗S44)H21.6.10
赤羽　彰(苗S27)H21.8.26
池田昭男(苗S27)H21.8.3
池田　昭(苗S27)H21.2.4
石原貞夫(苗S30)H21.10.6
伊藤節郎(院S30)H21.1.12
西村富次(友S12)H21.5月
柳澤昭雪(友S27)H21.10.31
魚住　尚(友S32)H21.11.17
細川敬次郎(工S15)H21.9.13
中野喜一(工S18)H21.11.7
佐藤正明(工S26)H21.10.22
横畠正介(甍S18)H22.1.12
石原　博(甍S23)H21.8.2
峯島靖夫(甍S24)H21.11.27
佐古　一(苗S14)H22.1.13
(2009.11.18～2010.2.22 受付分)

●主な会務の報告

2009年11月以降の主な会務を報告します

●会議……
・第3回理事会…2009年11月18日
・企画運営会議…2010年1月20日
・第2回職域幹事会…1月27日
・特別功労賞選考委員会…3月3日
・第4回理事会…3月3日

●活動……
・メールマガジンの発行：12、1、2、3月号
・特別見学会「東京都市大学建築学科棟」…11月17日
・早稲田大学建築学科教授　入江正之氏講演会…11月27日
・「OBによる仕事紹介」…12月19日
・設計製図公開講評会(支援)…2009年10月26日、2010年1月19日、1月30日
・新年会…2010年1月27日

●事務局便り

理事会が稲門建築会の実行組織であることは、前回のこの欄で紹介しました。現在44名の理事(内学生理事6名)と10名以上の委員がおり、総務委員会、会員委員会、事業委員会、広報委員会の4つの委員会に分かれて活動しています。

総務委員会は総会、評議員会、理事会などの会議を主管する他、会計監理、規約類の整備など稲門建築会の運営全般に係わり、事務局と一体になって活動します。

会員委員会は広範な会員に係わるところを主に分掌します。具体的には会費納入率の向上策の検討、教室と共催する学生会員の就職支援に繋がる活動、職域幹事を通じた稲門建築会の活性化、などです。

事業委員会はいろいろな事業を企画・実行する会員サービスの最前線です。具体的には話題の建物などの見学会、時宜を得たテーマの講演会の他、先輩建築家の図面資料を収集整理し、それを材料にセミナー形式の懇談会などを行います。

広報委員会は「早稲田建築ニュース」を年3回、機関誌であるイヤーブック「WA」を年度末に発行する他、学生理事が中心となって「メールマガジン」を毎月配信しています。

これら行為の最終章に個々の会員がおられるわけであり、ボランティアで活動する理事、委員の存在を意識していただけると有難く思います。大木紀通(事務局長／苗S42)

●編集後記

本号の特集は、今回が初めての試みとなる「設計製図企業共同課題」です。実社会の最前線で活躍する設計者が教師となること、家ではなく大学の製図室での設計作業を行うこと、毎週個別にエスキースをチェックすることなど、従来の課題とはまったく異なった環境とプロセスの中で進められました。学生にとっても、大学にとっても、また教える側にとっても刺激的なプログラムであったと思います。

私も、最後の公開講評会に参加いたしましたが、3時間余りにわたる熱のこもった議論に建築教育の新しい可能性を感じました。来年以降のさらなる展開を期待します。

宮川浩(広報委員／苗S56・院S58)

2010年春の大会

日時：5月28日(金)

◎総会・講演会・懇親会を開催いたします。詳細は別紙ご案内をご覧ください。出欠は同封のハガキで。